

十二月の第四回定例会を終え

もり
大 森 勝 夫 の 音
おと
信たより



平成 21 年が良い年であることを願います

みなさんこんにちは 大森勝夫です

今回は十二月の定例議会をご報告いたします

世界的な不景気に漠然とした不安感がつのる日々

こころなしか寒い冬に感じてしまつたものです

下降気配のときは、なかなか好転を想像できません

でも夜明け前に気温が一番冷え込みます

そして、やがてかならず夜明けは訪れるものです

夜明けを信じ、力強く前へ進む人々が増えることが

現状打破へのきつかけになるのではないでしょう

か これからの日々、日の出は早く日没は延びていきます

暖かな日差しにつつまれる日はさぞ遠くはないはず

小中学校の適正配置について

学校統合は先の話なのでしょうか？

標題の「適正配置」とは、大子町の小中学校を、どのように統合していけば、最適となるのかという意味をもっています。

学校統合の題材を取り上げたのは、少しでも早く、皆さんに現状を知ってもらいたいとの思いがあったからです。子供は減ってきていると感じていても、学校の実情は伝わりづらいものではないでしょうか。

将来の児童数の目安である、出生者数の減少により、早い時期に大子町の小中学校の統合を進めなくてはならない状況にあります。

最近の大子町で一年間に生まれてくる赤ちゃんは約百人前後です。したがって、「大子町全体での一年生は百名です」となる時期がやがて来ます。

皆さんが子供のときの同級生は何人だったでしょうか。百人近くいた世代の方もいるのではないのでしょうか。昔、各地区に学校があり、その一校の一年生の数が、いま一年間に生まれてくる大子全域での赤ちゃんの数になつてしまつたともいえるのです。しかも、さらに減少が危惧されています。

児童数の減少は、大子町に限つたことではなく、県内の他の地域でも同じように起

ています。日本全体の人口が減少傾向へ転じ、少子化が進めば、地方はその傾向が顕著に現れてしまいます。

そこで、茨城県でも、学校を統合していく方針を固めました。学校数が変わらず、児童数が減少してしまつては、充実した教育環境を目指しても無理が生じるとの判断からです。

県の指針によれば、小学校はクラス替えができるよう一学年2クラス以上。小学校は六学年ですから十二学級ある学校規模。

中学校は専門教科の先生が所属できるように一学年3クラスの九学級以上の学校規模とすることが望ましいとしています。現在と比べると、けっこう大きな学校規模となります。

では大子町でその条件をあてはめて考えて見ましょう。いま生まれてくる赤ちゃん百名が生徒になり、一学年百名の時代がきたなら、3クラスある中学校だったら、一校で事足りる計算になつてしまいます。現在五校ある中学校が一校で理論上適合してしまうのです。

大子町ではどうなつてゆくのでしょうか？

大子町において、学校統合の問題を適正配置委員会で検討し、示された中間案によると

小学校は二つの学校を統合の核とする

・ だいご小学校

・ 大子西中学校に併設される小学校

中学校は二つの学校を統合の核とする

- ・ 大子中学校
 - ・ 大子西中学校（小学校併設）
- というような案でした。

中間報告案ということですので、今後検討が重ねられるでしょうが、現段階での疑問点を質問しました。

問1：中学校の生徒数格差が開いてしまう

大子中学校は生徒数が一番多い。そこへ、黒沢中、生瀬中、南中の三中学校が統合し、西中学校は統合しないという案では、生徒数の格差が五倍になってしまいます。五校ある中学校が、四対一の比率で統合では、「適正配置」に値しないのではないのでしょうか？

【町長 答 弁】

中学校が二校になってしまつより、大子町内に二校あったほうが適切と考える。今後、多くの方と話し合い、検討を進める。

【大森勝夫 所感】

学校は昔から地域の心のよりどころでした。今回の統合危機は、今までに無い大問題だと思います。大子町の地理的状况もふまえ、将来に悔いを残さないような方針を選び出さなければなりません。町全体を見据えた町民の理解が力ギとなるでしょう。多くの町民に現状を知ってもらつことが大切です。

問2：南エリアでは若者離町の危機に？

西金小と統合し数年の上小川小でさえ、新入児童が十人未満になりそうな傾向である。水戸方面へ通勤している親が多いが、学校が統合されれば、親子の通う方向が正反対になり、病気時などの送迎は困難になる。不便さから、町を離れる若者家庭も現れやすい。

【教育長 答 弁】

事実、結婚した若者は、賃貸アパートが少ないため、山方大宮エリアに転居してしまう。子供の入学を機に地元へ帰る予定が、貸家が無いために帰れず、結局、町外の住民となつてしまつパターンが多い地域です。この地区に町営住宅が無いことが原因かと思われます。「若者の定住できる町」が指針であるならば、取組むべき課題ではないでしょうか。

【町長 答 弁】

(他地区に)五棟町営住宅を整備中である。今後は南の地域にも町営住宅の用地取得をふくめ整備を考えていきたい。

【大森勝夫 所感】

多くの観光客が国道28号線から大子へ訪れるように、大子町の第一印象をきめるエリアです。大子へ入つてすぐに、町営住宅が目に入れば、「大子は若者が住んでいる町」という好印象を与えられる。町外転出をくいじめ、町に帰つてきてもらうためにも、喫緊の課題だと思えます。外観も調和の取れた景観が評価の分かれ道になるのではないのでしょうか。

問3：校舎の耐震化工事で、寿命は延びるの？

大子中学校の校舎は約四十年が経過している。耐震工事は「億」の単位の工事となる。お金をかけて工事しても、十数年経つたら建物の寿命が来ましたでは話にならない。耐震化工事後の耐用年数は何年くらいになるのでしょうか。

【教育長 答 弁】

現在二次診断の結果待ちの状態。診断結果により、耐震化により十分使用に耐える場合と、工事しても効果は期待できないなどの判断ができるようになる。その後、耐震化工事などの方針を決める。

あとがき

このほか、町内への企業対策を含めた雇用問題と、交流センターの運用計画についての質問をしました。

【大森勝夫 所感】

学校の統合問題は、とても重要な課題です。全員が納得する円満解決はありえない分野ではないでしょうか。しかし、危機は好機と言われます。この問題を町民誰もが真剣に考えることにより、大子町がひとつになる好機ではないでしょうか。町民間の心と心の距離が、ぐつと近くなれる機会と捉えましょう。

「豊かさ」でも、心の豊かさでは何処にも負けない町になることを願います。

大子町議会議員 大森 勝夫